宮澤賢治「どんぐりと山猫」論

――童話集『注文の多い料理店』をめぐって――

斎藤寿始子

宮澤賢治の童話集『注文の多い料理店』[1]に収録されている作品の考察を通して、創作目的と主題、作品の構造上の特質を明らかにすることが、本研究の目的である。なお、本研究に先行する〈「注文の多い料理店」研究――「行きはよいよい帰りはこわい」の世界をめぐって――〉[2]には、童話集成立の経緯と、宮澤賢治の童話のもつ意味、童話の基本的構造について若干の検討を行った。ここに、その要旨を記して、本研究の序にかえたいと思う。

童話集『注文の多い料理店』収録作品は、一九二一年（大正一〇）一月に上京し、国柱会の高知尾智輝の指導のもとに、信仰と文学活動を一体化しようと志した時から、翌年一一月の妹トシの死に会う間の二年間に、集中的に制作されたものである。したがって、執筆の目的は、宗教実践としての「行」そのものであった。法華経の行者、宮澤賢治の作品は、日本の民間説話と同じく、神仏が法華経の力によって、賢治という行者の筆を借りて顕らかにされたものと意味づけられる。

ここで問われる宮澤賢治の宗教とは、日本古来の山岳信仰や祖霊信仰を母体とし、仏教の念仏と禅と法華信仰の一体化したものである。その作品を、子どもたちが読むことは、文学を通して、芸術的経験と宗教的経験を、宮澤賢治と共有することである。当然、子どもの読書という行為は、賢治と同じく宗教実践としての「行」となる。

賢治は自ら作成したといわれている広告文に、読者対象の最下限を、大変明瞭に「少年少女期の終り頃から」と示している。子どもと大人の境目の時期に、賢治の童話集を

読むことは、人生における通過儀礼の「行」に匹敵するわけである。

児童文学の物語の展開に、「行って帰る」という基本的な構造がある。「行って」「帰る」その間の出来事は、成人への試練の要素を備えている。この試練は、しばしば主人公の生命を賭して乗り超えなければならないものとされる。賢治の童話の場合、読むという行為が、単なる受身の享受にとどまるものではないので、読者は、主人公と共に、命賭けの厳しい試練を克服しなければならない。それは、文字通り日本の民俗信仰における「擬死再生」の現代的な方法による儀礼の経験といえよう。

作品「注文の多い料理店」では、主人公の二人の若者は、山中で、山の神の化身である山猫の試練に敗れ、かろうじて命はとりとめたものの、紙屑のような顔になってしまう。この失敗譚は、民間説話の「浦島太郎」の他界往来譚の結末と比較される。また、この作品の構成には、東北に根強く伝えられている「隠し念仏」の成人儀礼「御執揚（おとりあげ）」が、巧みに取り入れられており、作者宮澤賢治の童話の目的と主題を、いっそう確かにしている。

そこで今回は、初版本及び広告ちらし(大)の目次に、九作品中、第一に掲載された作品「どんぐりと山猫」を取りあげて考察を試みたいと思う。

(一)山猫から一郎へのメッセージ

賢治自身が綴った広告ちらし(大)の、作品紹介の文は、この作品が、イニシエーションの構造と、批評精神をもつものであることを予告している。

山猫拝と書いたおかしな葉書（ママ）が来たので、こどもが山の風の中へ出かけて行くはなし。必ず比較をされなければならない（ママ）いまの学童たちの内奥からの反響です。

前半には、「おかしな葉書」に呼び出された「こども」が「山」の「風」の中へ入って行くという、発端部の要素が記されている。後半は、作者の近代教育、学校教育への批判がこめられている。この後半は、「注文の多い料理店」の都会文明批判と同趣向である。

本文は、三人称で表現されているが、視点は、一郎に置かれている。広告ちらしで、予めこの童話の主人公が、「こども」であることを示されており、本文で、他界往来をするのも一郎であることからも、主人公を一郎とし、これに視点が置かれていることは当然のことである。

けれども、主人公の一郎が、行動を起した原因は、山猫から送られてきた「おかしな葉書」によっている。物語の

モチベーションは、山猫によって起され、山猫の意志によって終了している。しかも山猫は、自在に、山の中と、一郎の住む里とを行き来できる。

山猫が現われた時、風がどうと吹く。広告ちらしにあった「山の風の中」という言葉は、単なる「山」ではなく、「風」によって象徴されているもののところへ、出かけることが意味されていたのであった。

したがって、この作品を解読するには、主人公一郎の視点の陰にあって、この童話を動かしている支配者ともいうべき「山猫」に着目する必要がある。山猫の視点から観たときに、現われてくる要素は何であるか。ここで、この作品が収められている本のタイトルが、『注文の多い料理店』であったことを思い出さなければならない。

作品「注文の多い料理店」でも、二人の青年を主人公としながら、山中の料理店の主人として、山猫が重要な役割を果していた。山の神として、山中のみならず、里人たちをも支配するこの霊的な存在は、二作品に共通するキーワードとして機能している。

山の神は、その麓の里人にとっては祖霊神である。祖神に、里の子どもが呼び出されたのである。一郎の道中の間に、山猫は馬車で山中の見まわりをしている。いわゆる、山の神のヤマミである。そして、一郎はどんぐり裁判の場に臨み、判事の役目を勤めたが、裁判長は山猫であり、判決は山猫によって申し渡されている。

この判決は、一郎の考えによっているようであって、実際は、一郎の判断の良し悪しもまた、山猫に裁かれているのである。もし、一郎の判断が誤っていたら、はたして山猫はそれを採用したであろうか。無事に里へ帰還できたであろうか。一郎には、名誉判事の地位が与えられるが、前日の判事はどうであったのか。どんぐりたちの言い争いの最中の言葉に「さうでないよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのふも判事さんがおつしやつたぢやないか。」とあり、前日、その場に大小を比較した判事が居たことになっている。

一郎の判断が採用され、どんぐりたちが鎮まったことは、山猫による試練を、一つ通過したことになる。しかも、その成績は好ましいものであったと思われる。

山猫は、次なる試練をもって一郎に臨む。葉書の文面である。その次には、お礼の品の選択である。このように次つぎ試練を仕掛けたのは山猫であり、無事に通過したのは、一郎であった。

作品「どんぐりと山猫」を、筋（プロット）の展開に従

って分析すると次のようになる。

一 発端部（難題の発生）

山猫から一郎に、裁判への招請。

二 展開部（難題の克服）

A 山中他界訪問

(イ)行き先不明の誘い

(ロ)栗・滝・きのこ・栗鼠との問答

(ハ)馬車別当との問答

B 裁判の立会い

(イ)煙草の誘惑

(ロ)判決（援助）

(ハ)土産の選択

三 結末部（帰還）

帰宅、他界との交渉の終了。

右の通りこのプロットの展開は、民間説話の構造に酷似している。ことに、昔話の年頃の主人公が、一様に、祖霊の籠る山中や海上の他界を訪れ、神仏の試練に会い、勇気や力や知恵や愛によって難題に立ち向い、他界の神仏の援助を受け、恩恵を得てこの世に帰って、めでたく成人となるタイプと一致する。例えば「桃太郎」「一寸法師」「なら梨とり」「米福粟福」などである。

こうした宮澤賢治の童話と、民間説話の昔話との構造の一致は、作品「注文の多い料理店」の場合に既に認めらた。しかも、両者共に、物語を展開させる因果関係の背景に、日本固有の滅罪往生の論理に基く通過儀礼が関わっていた。賢治の作品は、近代児童文学における日本の民間説話伝統を継承した典型であると思う。

(二)他界の論理と子どもの論理

先の章で、作品に内在している山猫の視点について触れておいたように、この物語は、山猫によって仕掛けられたものである。そうすると物語は、一郎の所属するこの世の論理ではなく、山猫の支配する他界の論理によらなければならない。一郎は、他界を訪問し、他界の論理の中へ入って、最も論理を尽さなければならない裁判に立会うことになる。

しかし、ここで興味深いことは、一郎の役割が判事とされている点である。判事であるからには、他界に在っても、他界の論理や権威からは自由でなければならない。一郎の意見は、一郎の心のままに発言できる立場が保障される構造をとっているのである。

もう一度、筋の展開通り、時間的順序に従って、一郎の

難題克服の過程を検討していくことにしたい。

発端の、山猫からの葉書には、「あした」と日の設定は示されているが、場所も時間も明らかにされていない。しかも、山猫という恐ろしく怪しい相手は、飛び道具を持たないで来いと、願いとも命令とも判断しがたい申し入れをしている。それでも一郎は、翌日、日曜日の朝から、山猫を訪ねて、山の中へと谷川に沿って小道を上の方へとたどって行く。

行き先のわからない一郎は、栗の木、笛ふきの滝、ぶなの木の中の白いきのこ、くるみの梢の栗鼠に援助を求める。一郎の問いに対して、それぞれに山猫の消息を教えてくれるが、一貫性に欠けていて、惑わす結果となる。山猫は山神のつとめとして、あちこち山見に忙がしかったのであろう。一郎に問いかけられた者たちは、正直に、目にした通りの山猫の消息を答えたものと思われる。

一郎は「おかしいなあ」と思いながらも、主体的に「もっと」「も少し」と道の続いている方向へと上っていった。その結果、山猫の居場所である「立派なオリーブいろのかやの木のもりでかこまれて」ある場所、「うつくしい黄金いろの草地」にたどりつくことができるのである。

おかしな葉書、おかしい道案内、他界の不思議な時間と空間の中へ、一郎は子どもの持つ素直な感覚のままに足を運び、目的の場に立つことができた。山猫の支配する論理の世界へ、一郎は子どもの論理で臨んだのである。

そこには、背の低い「おかしな形の男」がいた。片眼で、足がひどく曲って山羊のようで、しかも足先が飯を盛るへらの形をしており、手に革鞭をもち、上着のような半天のようなものを着た、顔面に赤味のある奇妙な男である。その描写から、昔話に親しんだ読者であれば、山の神の姿が想起されよう。

男は、一郎への葉書を書いた人物で、顔を合わせるといきなり、葉書の文章や文字について、一郎に挑んでくる。

かなりおかしな葉書ではあったけれど、葉書の出来不出来とは関係なく、これを受けとった一郎は、嬉しくてたまらなかったのであった。いま、目の前に、奇体な男の、葉書の出来映えを気にして、悲しそうに話す様子を見て、一郎は「きのどく」に思う。相手を思いやり、いたわる心が起こる。一郎の心づかいを素朴に喜こんだ男は、一郎の「あなたはなにですか」との問いかけに、厳粛な様子で「山ねこさまの馬車別当だよ」と身分を明かす。

山猫に仕える馬丁とはいえ、山の神に属すものである。片目、足の変形、赤い顔と容姿も山神の特徴を具えている。

もし、一郎の応答に不満があれば、たちどころに恐ろしい山の神の側面を露呈するはずである。また、他界のものが、名や身分を明らかにすることは、容易なことではない。昔話「大工と鬼六」の例も一つだが、相手を許した時、相手に負けた時にのみ明されるものである。同時に一郎は、尋ねる場所も明らかにされ、いよいよ裁判の場に臨むこととなる。

「風がどうと吹いてきて」山猫が登場する。展開部Bの裁判の立会いの場面である。山猫が、風を起して出現する様は、風神・風天を従えている山神の風格そのものである。

裁判立会いへの最初の関門は、煙草の誘惑からである。山猫のすすめに、一郎が断ると、山猫は「まだお若いから」とすんなりと受け入れて無理強いはしない。この作品の成立の頃、喫煙は、徴兵検査を済ませて初めて許される成人の特権の一つであった。煙草を欲しがっている馬車別当の気を付けの姿勢にも、この辺の事情が描かれているのであろう。こうして、第一の難題を退けると、いよいよ裁判の場面となる。

黄金の草地に登場する山猫は、馬車別当の悲しいまでに純朴な存在に対して、凡俗な権威に満ちた姿で描かれている。山猫と馬車別当の相異なる二面は、そのまま山神の両義性にも繋がるところである。他界の論理には、この世の論理を超えたものがあり、この世の凡も非凡も、聖も俗も、権威も非権威も、全てを包括した十界皆成仏の世界観である。

塩のはぜるような音をさせて、どんぐりは登場してくる。山中に塩の按配は、聖域への進入の暗喩と読みとれる。黄金のどんぐりは赤いずぼんをはいて、夥しい数で現れる。

どんぐりは、通常ブナ科の木に成る果実で、椀状の穀をつけているが、物語の場所は、イチイ科の榧の森の中の草地である。榧の実も楕円形の核に被われた実が成るが、いわゆる袴は付けていない。赤いずぼんははいていないが、榧の実はブナ科のどんぐりに比べると、濃い赤味を帯び、両者のイメージの重なりが認められる。

草が刈りとられ、裁判開始の場面の、色と音と空気と光るどんぐりと山猫の黒い服の調和は、奈良の大仏のことを思う一郎を含めて山中浄土を思わせる描写である。

大勢の中で、誰れが一番なのか。賢治の広告ちらしの文の「いま」は現代に受け継がれて関心を誘われる。子どもたちの上に、比較が持ちこまれたのは、決して近代教育に始まるものではない。山猫の活躍する昔話、山神を畏怖する民間説話の中にも、しばしば出てくるモチーフである。

問題は、比較の原理の相異にある。読者には思いがけない判断だが、山猫にもどんぐりにも説得力をもっていたことを見逃してはならない。どんぐりは鎮まったのである。

宮澤賢治は、民間説話の豊かな伝承をもつ東北で精神を培われた。化学者としても、土や石から学んだ人であった。そして、文学の底流に民間信仰の思想があるとすれば、民間説話の比較の原理と密接でなければならない。

「遠野物語③」の第二話に、三人の姫神の国定め神話がある。

大昔に女神あり、三人の娘を件ひて此高原に来り、今の来内（らない）村の伊豆権現の社ある処に宿りし夜、今夜よき夢を見たらん娘によき山を与ふべしと母の神の語りて寝たりしに、夜深く天より霊華降りて姉の姫の胸の上に止りしを、末の姫眼覚めて竊に之を取り、我胸の上に載せたりしかば、終に最も美しき早池峯の山を得、姉たちは六角牛と石神とを得たり。（略）

夢と霊華の関係については三浦佑之④による詳細な研究があるが、ここでは、結論として三人姉妹の末娘が、人の世の常の論理を超えた方法で利を得ていることに着眼する。同じように、三人兄弟が優劣を争い、末子が相続することになったり、愚かな長子または末子が勝を得たりする例も、民間説話の世界では決してめずらしいことではない。

兄弟姉妹の優劣を競う話の原型は、末子成功譚が原型を成している。千村渉⑤は、末子成功譚の発生起因説を整理して、(1)弱者同情説（蘆谷重常・柳田国男）、(2)文芸的技巧説（柳田国男）、(3)末子相続反映説（松村武雄）、(4)古代信仰末子神聖説（神谷吉行）とし、弱者を尊重し、神聖視する意識が、文芸的技法と結合し、伝承の間に家族制度や兄弟観の変化によって話に変遷が生じたと見ている。千村渉の説の基底となる弱者尊重、末子神聖観は、神谷吉行が⑥、柳田国男の「妹の力」になぞらえて「末の力」を尊ぶ民俗が、かつて信仰の強烈な時代にあったとする説につながっている。神谷吉行は「末子の神ながら神さびて居る姿」を伝承する口承文芸であるとしている。この観念的な「末の力」説を、具体的に口承文芸の、説経正本「さんせう太夫⑦」の結末部から考えてみたい。

寛永年間（一六二四～一六四四）に成立したとされるこのテキストの結末に、つし王がさんせう太夫を生埋めにして首引きを三兄弟に命じる場面がある。太郎次郎は許されて、非道の仕打ちをした三郎にのこぎりが渡される。三郎は「一年中のねんぶつを。いつのやくにたて給はん。しで三づの川を、此三郎めが、おひこしてまいらせん。」とあっ

て、三郎が親の滅罪と贖罪を念じて首を引き終える。江戸初期に説経正本が成立する背景には、前時代、中世庶民の宗教観を引き継いでおり、末子と親との関係が浮上してくる。すなわち、末子相続にしても、単に、土地や財産の相続という近世的な解釈ではない。神聖視される理由に、親の最後を看とり、その霊を祠る者としの末子の役割に意味をもたせていると考えられる。

親の死の穢れに会う役割は、宗教者と同様に厳しく、他と差別を受ける対象であったことも否定できない。これが、物語構成においては文芸的効果の技法と相俟って、その性格が強調される時、人並みはずれた知恵者になり、愚者になる。同時に、親の御霊に助けられて、思いがけない幸運をつかむ構造も成り立つ。昔話や童話の比較の原理もここにある。

恩田逸夫は、この「どんぐりと山猫」を論じた際に、賢治の思想を、凡愚礼賛・神愚一如とした。[8] トルストイの「イワンの馬鹿」における思想との一致を見たのであるが、宮澤賢治の思想の根幹に、東北の土俗の信仰を認めるならば、ロシヤ文学との共通性もさることながら、中世日本の語りもの文芸の思想との一致をより親密に考えられる。

東北には、説経祭文「お岩木山一代記」[9]が伝えられている。先の説経正本「さんせう太夫」と同じ「あんじゅ」と「つそう」を主人公とする、東北の霊山岩木山の本地を説いた口説がある。菅江真澄によってこの口説は、東北各地に伝承され、岩木山や岩手山の本地を説いていたことが知られているが、主人公の「あんじゅ」もまた、姉兄妹の末子である。山伏からイタコへと語り伝えられているところからも、これらの物語りの宗教性とその原点は、東北の山岳信仰に源をもつことに疑いの余地はない。そして、一郎の「ぼくお説教できいたんです。」という言葉も、ひといきに解決できる。お説教は、お説経から転じたものであることは、今日、周く知られているところである。

一郎から山猫へ伝えられ、どんぐりを鎮める力をもった言葉は、山中他界の論理の上に展り開げられた子どもの言葉であった。しかも、その子どもの言葉は、霊山の本地を説いた説経の援助を受けていたのである。

最大の試練を終えた後に、締めくくりとなるのは土産の選択である。昔話の常套句「大か、小か」がここでは「黄金のどんぐりか、塩鮭の頭か」となる。山猫が人格（神格）にかけて受け取りを強いた土産は、一郎によって正しく選択された。山神の食べ物、贄と、里人の食料は、誤ってはならない。

葉書の文面の命令調に対しては、一郎はきっぱりと断っている。これで他界の支配下から離れ、成人への第一歩を踏み出すこととなる。結末部の伏線をなす重要な選択である。他界での試練を克服した一郎は、丁重に送られて無事帰還することができた。他界とこの世を往き来自在であった子どもの時間は終った。一郎のもとに、再び「山ねこ拝」という誘いは来ることはないのである。

「やつぱり、出頭すべしと書いてもいゝと言へばよかつた」と一郎がときどき思うのは、子ども時代への郷愁であると同時に、成人になっても忘れてはならぬことだからである。小川未明の観念的な童心義に比べて、宮澤賢治の子どもの論理の有用性の主張は明解である。

㈢時と所をもとめて

山猫から一郎へ宛てて出された葉書は、九月十九日。初版本の目次に記された制作日と、同じ九月十九日である。二百二十日を過ぎたとはいえ、風の季節ではある。

東北の農民にとって、ようやくの思いで稔った穀物を、風に浚われることは堪え難いことである。その思いは、秋祭りとして、御霊を鎮め、収獲を祝う行事を生んだ。

宮澤賢治が死の床で詠んだ「方十里稗貫のみかも稲熟れてみ祭三日そらはれわたる」について、分銅惇作は、「み祭」を、賢治の地元花巻、鳥谷ケ崎神社の祭礼の九月十七日からの三日間を当てて解釈している。[10] 九月十九日は、確かにこの祭礼の最終日に当る。

また、柳田国男編の「歳時習俗語彙」によれば、「サンクニチ」として「九月三度の九日を、東北では三九日と謂ひ、中には末の二十九日を重しとした地方もあつた（けふの挟布）。秋祭は稲の収獲を終つてからでないと行はれぬので、農事の都合によつて必ずしも初の節供を守つては居られなかつた為かと思ふ。（略）」とあり、中の九日が秋祭とされる、民俗的な根拠を示している。

この日に、宮澤賢治は筆を執り、山猫すなわち山の神に、里の子どもを呼び出させている。他界とこの世の交信のなされる時として、民俗信仰の背景をもつ九月十九日は、格別な意味を持っていたのである。

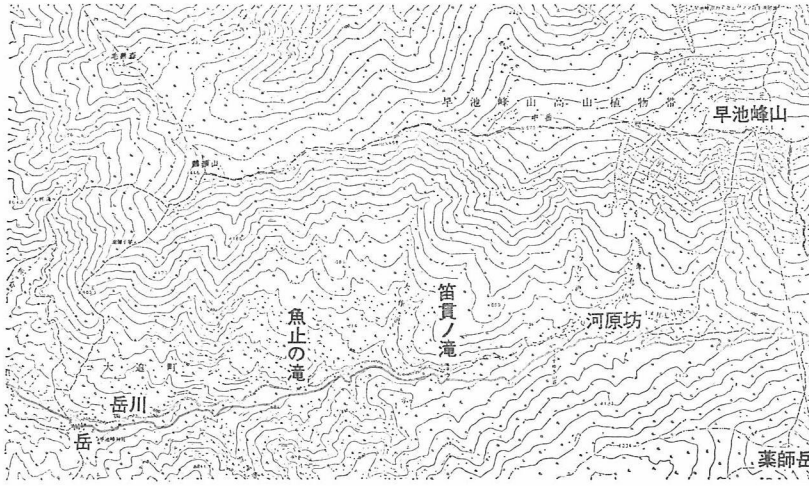
そして、日曜日の朝、一郎は谷川に沿った小道を、ひとりで上っていくことになる。一郎の辿った道については、亀井茂の詳細な現地考[11]が発表されているが、この立論の基本に関わる所に疑問がある。すなわち、一郎が道中で道を尋ねた時、その答が東西南南であったことをそのまま受けて、地点の考察を行っている点である。本論では、先の章

で考察した通り、確かに問われたものは、東西南南と答えたが、一郎は「とにかくもっと」「けれども、まあも少し」「まあもすこし」「けれどもまあもすこし」と、自分の進んで行く方向、川の流れを上流へ、東へと歩みをすすめる。

一郎がすこし行きましたら、谷川にそつたみちは、もう細くなって消えてしまひました。そして谷川の南の、まつ黒な榧の木の森の方へ、あたらしいちいさなみちがついていました。一郎はそのみちをのぼつて行きました。

ここに描かれている谷川は、宮澤賢治が地質調査に臨み、詩にもうたい、埋経の地の一つにも数えた早池峯山南麓を東から西へ流れる岳川であり、一郎の住居は、早池峯の南登山口、大迫からのルートの岳という村に相当する。稗貫妙泉寺と新山宮の後身に当る早池峯神社があり、早池峯の岳神楽を伝える村である。ここから岳川を溯る河原坊コースを行くと、魚止の滝、笛貫の滝を通過して、早池峯山の真南、一合目の河原坊に出る。宮澤賢治三七四番の詩「河原坊（山脚の黎明）」にうたわれた神秘的な地である。

河原坊コースは、コメガモリ沢に導かれるように北へ、山頂をめざして登り道となる。一方、そのまま岳川に沿って東へ進むと、谷川は消え、小田越に出る。北へとれば、小田越コースで御門口から山頂へ通じるが、南は、早池峯と三～四キロメートルで対峙する薬師岳への道がある。薬師岳は、遠野側からは早池峯山の前山として、一体化された信仰対象の山



となっている。[12] 早池峯の本地仏は、十一面観音であるから、仏教伝来後、最も早く全国的に普及したのが薬師信仰であったとすると、南北に向かいあう二山のうち、薬師岳の信仰が先に隆り、やがて十一面観音信仰に吸収される形で、早池峯修験と一体化したものと考えられる。遠野側から望む神秘的な秀峰早池峯山は、三宮中の奥宮として、最後に開かれた地理的条件とも一致するところである。

『早池峰の自然観察』[13] によれば、蛇紋岩山地の早池峯山に対して、薬師岳は花コウ岩で分布する植物相に違いがあるとされている。作品に則して見れば、岳から河原坊一帯はブナ林、薬師岳もブナ林であるが、小田越コースの小田越から御門口は、コメツガ、ナナカマド、イチイ、ハイマツとある。

一郎が、岳の村から東へ東へ東へとたどったコースは、どんぐりを実らせるブナ林地帯で、分岐点で南へ採った地点には、イチイ科の榧の木が描かれていることに不自然なところはない。北への早池峯南面は、コメガモリ沢に添っていて溪畔植物となり、様相を異にしている。

幕末の寺小屋の教科書『早池峰詣』[14] に、この辺の描写がある。遠野附馬牛に住んだ下級武士、中鉞衛門によって書かれたもので、早池峯山西の登山口、遠野の附馬牛の大出からの道中が描かれている。

早池峰山参詣思立　大出新山え詣　夜前令発足候　大野原馬留より左沢え入　又市の滝令巡覧直に薬師え御堂拝み　潔月の跡伝　樅木檜原より入ば　八千八沢の駒鳥の声　もの凄く　末枯の梢　猿拝吹荒　河原之坊にて夜もほのぼの明渡り　滝水にて垢離を掻　常盤木茂る七里川原　小金交りの真砂敷御門口にて　巌一面之御山と成（略）

とあり、大出の新山宮、薬師堂を経て、遠野側の河原坊（本文では岳の方を川原の坊と別表記している）を過ぎて常盤木の林をぬけた所に、「小金交りの真砂敷く御門口」とあるのは、砂金を指していると思われるが、早池峯にも金を出した時代があり、「遠野物語」の隠れ里と黄金伝説の根拠をなすものである。

この黄金のイメージは、岳から河原坊、そして小田越、御門口とたどった一郎の眼前に、いきなり開けた黄金の草地のイメージと一致する。一郎の求めた東の方角は、薬師如来、薬師瑠璃光如来の浄土、東方浄瑠璃世界であったと考えられる。

「とびどぐもたないでくなさい」の禁忌の言葉の背景には、『奥州南部早池峯山縁起』[15] の「権現誕生附来内村新宮創

草」に

早池峯山大権現誕生ハ平城天皇ノ御宇大同元年丙戌三月八日ナリ。当時閉伊郡遠野来内村ニ藤蔵ナル者有ルナリ。狩猟ヲ以テ産業ト為ス。（略）

とあり、ある時、風雪を避け岩窟に宿っていると、深夜に猟犬が吠えるので出てみると、光が赫々と日中の様であったので、その所を尋ねると金石の佛像が頂上より光を放っているのを見た。藤蔵は「抑亦余ノ屠殺ノ積罪ヲ罰スル為ニ出現シタルカ。然ラバ速カニ予ノ身命ヲ絶テ」と眼を合せ清心名号を唱えて、眼を開けると光は風雪とともに散って青天となる。藤蔵は弓を斬り、箭を渡して神を祭った。

縁起の序から、元禄十一年の成立とみられるが、物語の猟師発心譚は、他の山岳開創説話と共通であり、説話の成立は古代から中世に遡り伝来されたものと推定できる。

藤蔵と山神の交渉から、山人と山神の共存共栄の契約が成立するところが読みとれるが、菊地照雄氏の指摘のように、権現を山頂で感得した三月八日は、山の神が田の神になる日だと遠野では信じられており、九月の早池峯山閉帳（九日御嶺ノ宮、二九日新山宮）は、田の神が山の神になる日といわれている。同時に、三月八日は、しばしば薬師の縁日とされる日であることも注目に値する。[16] 九月の閉帳の日が、先に考察した「サンクニチ」であることも無視できないところである。

猟師藤蔵の出た来内村は、先に引用した神話「遠野物語」第二話の「三人の姫神」が母神に伴われて宿った所である。引用の続きは、

若き三人の女神各々三の山に住し今も之を領したまふ故に、遠野の女どもは其妬を畏れて今も此れには遊ばずと云へり。

と結ばれている。これは女人禁制を説いているのであるが、同時に、男子の修業の聖地として、厳しい戒律を持った山であることをも物語っている。

一郎の年令を、小学五年生、あるいはその前後として、数え年の十三歳を想定すると、宮澤賢治の童話を読む年令、広告ちらしの、

それは少年少女期の終り頃から、アドレッセンス中葉に対する一つの文学としての形式をとっている。

によく対応し、冒頭にふれた先の研究と同じく、少年の山中成人儀礼の構造をとったものである。この儀礼の本質は、山中他界における滅罪と往生の擬死再生であった。

最後に、童話「どんぐりと山猫」の主題を一郎という子どもの論理、中世説話の論理、古い時代からの日本人の他

界観のもたらした論理へと結びつけていくと、「いちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなってゐないやうなのが、いちばんえらい」とする判定は、近代文学の批判精神の上に立った近代批判ともなる。「デクノボウ」礼讃説でも、在来の価値の転換説でもなく、宮澤賢治の美の世界は、いかにも具体的な日本人の民間の信仰と歴史に裏付けられた日本文学として、現代の子どもたちから成人までの読者に機能するものと考えられる。子どもの読者への機能については、先の研究に述べたので省略する。賢治は児童を、十界に生きる存在と観ていたのであった。

註

① 童話集『注文の多い料理店』大正十三年十二月一日発行。発行者　近森善一。発売元　盛岡杜陵出版部　東京光原社。本稿底本は『校本宮澤賢治全集』第十一巻　筑摩書房　一九七四年九月一五日に拠った。

② 『児童文化の伝統と現在』中川正文教授定年退職記念論文集　一九八六　ミネルヴァ書房所収。

③ 『定本柳田国男集』第四巻　一九六八　筑摩書房所収。

④ 『村落伝承論――「遠野物語」から』一九八七　五柳書院。

⑤ 「兄弟譚の昔話――その優劣を中心に」『日本昔話研究集成四　昔話の形態』　一九八四　名著出版所収。

⑥ 「末子成功譚考」『日本昔話研究集成三　昔話と民俗』　一九八四　名著出版所収。

⑦ 『説経正本集』第一　横山重校訂　一九七八再版　角川書店所収。
東洋文庫二四三『説経節』荒木繁・山本吉左右編注　一九七三　平凡社。

⑧ 『宮澤賢治論1　人と芸術』　一九八一　東京書籍所収。

⑨ 『日本庶民生活史料集成　十七巻　民間芸能』五来重編　一九七二　三一書房所収。

⑩ 『宮澤賢治の文学と法華経』　一九八七新装改訂　水書坊。

⑪ 『早池峯』　三号　一九七四　早池峯の会。

⑫ 菊池照雄「早池峯修験と妙泉寺」『山岳宗教史研究叢書七　東北霊山と修験道』　一九七七　名著出版所収。

⑬ 『早池峰の自然観察』　一九七九　財団法人日本自然保護協会。

⑭ 『山岳宗教史研究叢書一六　修験道の伝承文化』　一九八一　名著出版所収。

⑮ 『山岳宗教史研究叢書一七　修験道史料集〔I〕東日本篇』一九八三　名著出版所収。

⑯ 『薬師信仰』五来重編　一九八七　雄山閣。

〔記〕　宮澤賢治研究に関しては、多くの先学の学恩を受けた。紙数の都合でほとんど引用・注記・参考文献等を省かざるを得なかった。宮澤賢治記念館には資料の提供をいただいた、記して御礼申し上げる。

（本学教授　児童文学）